

紀要

■設立40周年記念号

- 【小特集】東近江市相谷熊原遺跡をめぐって—縄文時代草創期の遺構と遺物**
- 「矢柄研磨器」雑考 —相谷熊原遺跡を理解するために— ……松室 孝樹(1)
- 鈴鹿山中の遺跡にみる選地の原理 —相谷熊原遺跡の理解に向けて— ……重田 勉(9)
- 土偶の機能・用途に関する理解の移ろい ……瀬口 眞司(15)
- * * *
- 高島市今津町弘川B遺跡出土の縄文土器(2) ……小島 孝修(28)
- 草津市志那湖底遺跡出土岩田第4類土器群の様相 ……小竹森直子(42)
- 近江・湖東北部の埴輪 ……辻川 哲朗(48)
- 製鉄炉の設置方法について —源内峠遺跡1号製鉄炉の検討— ……大道 和人(73)
- 古代建築物構造ノート —掘立柱の再考— ……横田 洋三(81)
- 塩津起請文札と勧請された神仏 ……濱 修(86)
- 三重県桑名市西方廃寺出土の飛雲文軒瓦について
—桑名市博物館所蔵品より— ……中西 常雄(92)
- 観音正寺と観音寺城跡(2) ……伊庭 功(95)
- 遺跡出土の化粧道具に関する覚書 —夏見城遺跡出土の毛抜きから— ……堀 真人(103)
- 将棋史研究ノート(5) 金将の役割 —金将の動きと配置から— ……三宅 弘(116)
- 「忍者」研究の現状と課題 ……阿刀 弘史(120)
- 文化遺産としての琵琶湖
—「水」を介した人類と自然の永続的共生を示す資産群— ……大沼 芳幸(124)
- 平成22年度滋賀県埋蔵文化財センター考古学体験学習を終えて ……具志堅有紀(142)
- 保存処理30年の記録 ……中川 正人(148)

24

紀 要

第 24 号

—設立40周年記念号—

2011.3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

文化遺産としての琵琶湖

一「水」を介した人類と自然の永続的共生を示す資産群一

大沼芳幸

1. はじめに

滋賀県の中心に位置する琵琶湖は、日本唯一の古代湖（十万年以上の歴史を持つ）であり、大湖（500km²以上の広さを持つ）である。その面積は、滋賀県域の約六分の一を占める。これまで琵琶湖に対する評価は、我が国においては類例のない特異な自然や、その環境から評価されることが多かった。はたして、自然や環境の面のみから琵琶湖を評価することは適切なのであろうか。

日本を代表する自然として、世界自然遺産に登録されている知床の自然に対し宇仁義和は、人と自然との交渉により形成された「歴史的自然」と表現している（宇仁2007）。同じく、自然遺産に登録されている白神山地にしても、屋久島にしても、原生自然のように見えるが、実はそこには人間の営みがあり、その中で形成された自然であることも指摘されている。

このような視点から琵琶湖を見たとき、琵琶湖に対する自然という観点のみからの評価が、琵琶湖に対する部分的評価に過ぎないことは明確に理解できる。琵琶湖ほど人間との交渉を受け入れてきた自然が他にあるだろうか。まさしく「歴史的自然」である。さらに、琵琶湖とその周辺に残され、継承される、様々な文化的な事象を含めて表現するならば「文化的自然」というべきであろう。そして、琵琶湖の文化的自然の価値は、自然が化石、標本として保護維持されているのではなく、生産の場として、そして資源として現代も機能し、この機能の持続が求められているところにある。

今、我々は、琵琶湖と永続的に共生する方法を模索しつつある。そして、その方法が、科学文明を駆使した琵琶湖に対する強圧的な行為だけではないことに、我々は気づき始めている。では、我々は琵琶湖を未来に引き継ぐために何をなすべきであろうか。極めて観念的ではあるが、そのためには、まず我々が琵琶湖の当事者となり、これを誇りとすることが不可欠である。その方策は、琵琶湖と人間が造り上げてきた文化が示してくれると考える。この文化を「琵琶湖文化」と呼ぶことにする。

文化とは、人間の生活、行動の中から生み出されたものであり、多様な要素が複雑に絡まり合いながら形成され、機能している。本稿では、琵琶湖文化を未来に継承するための基礎的な作業として、琵琶湖文化を総体的に、すなわち「文化遺産琵琶湖」として琵琶湖を評価してみたい。

そして評価の視点を、人間を含む生物の生命の根源である「水」に対する行為から生まれた、自然との共生に根差した多様な文化に置くこととする。

2. 文化遺産琵琶湖を構成する要素

文化遺産としての琵琶湖は、様々な文化的要素が有機的に絡まり合いながら形成されている。これらの要素を個々に分析することは、必ずしも適切ではないが、稿を進める上で、以下の四つの要素を取り上げ、これに関連する文化遺産について概説し、「水（自然）と人間との共生」に関する視点から評価、分析することとする。

（1）精神文化の母体としての琵琶湖

人間は自然の一員であり、自然と共に生きる生き物である。よって、人間界を取り巻く事物事象は全て人間と対等であった。そして、人間は取り巻く全てに対し、人為では及ばぬものの存在を感じ取っていた。所謂アニミズムの世界である。琵琶湖に集まる水は、様々な生物の命の源であり、この命を人間は生活の糧としてきた。この水が生まれるところが山であり、ここに水（生命）の誕生と永続を願う信仰が芽生えた。

ここでは、水（生命）の誕生に対する心象への視点から、関連する文化遺産を分析する。

（2）生活文化の母体としての琵琶湖

琵琶湖の畔で繰り返される日常の生活は、そうとは意識しないが、琵琶湖に配慮したものであった。それであるが故に、一万年にも及ぶ人間と琵琶湖の共生が持続されて来たのである。ここでは、自然の一員として、自然を尊重して生きる生活から生まれた文化を分析する。

（3）湖上交通・水を介した交流

琵琶湖は縄文時代から近代に至るまで、自然の運河として列島の流通を支えてきた。この結果、琵琶湖は、高い経済性と政治性を内包することになる。そして、このことを表象する多様な文化遺産が生まれ、継承されてきた。この様相を分析し、琵琶湖の持つ日本史的な価値を確認する。

（4）芸術母体としての琵琶湖

琵琶湖の景観は今なお美しく、これを仰ぐ人達に感動を与える。山々に生まれた水は滝となり、流れとなり、琵琶湖に至る。この近江一国内で完結した水景観は、庭園造形の形成に大きな役割を果たしたと考えられる。

また、琵琶湖を題材とした芸術は、日本文化を代表するものとして、海外の文化にも影響を与えた。ここでは、芸術の視点から、文化遺産を分析する。

文化遺産としての琵琶湖（大沼芳幸）

表1 文化遺産「琵琶湖」を構成する遺産群

1 精神文化の母体					
本文	資産名称	種別	所在地	概要	関連する要素*
(1)-①	延暦寺境内	史跡	大津市坂本本町	琵琶湖を浄土とした水信仰の中核寺院	3
(1)-②	葛川明王院	重要文化財	大津市坊村	比叡山回峰行の修行場	
(1)-③	日吉神社境内	史跡	大津市坂本	水に対する信仰を根源とする神社	3
	坂本	伝統的建造物群保存地区	大津市坂本	延暦寺に関連する寺坊群	3
(1)-④	延暦寺里坊庭園群	名勝	大津市坂本	比叡山から流れ出る水を祭祀する庭園群	4
(1)-⑤	竹生島	史跡名勝	長浜市びわ町早崎	水神（弁才天）を祀る島であり、天台宗の修行の島	3・4
	白髭神社	(重要文化財)	高島市鶴川	琵琶湖の守護神（薬師如来）出現伝説を伝える	3
	葛籠尾崎湖底遺跡	埋蔵文化財	長浜市湖北町尾上	縄文時代から平安時代まで続く水神祭祀の湖底遺跡	3
(1)-⑥	池の沢庭園遺跡	埋蔵文化財	高島市朽木村井	水源祭祀を表わす鎌倉時代の庭園遺跡	4
	伊吹山	天然記念物	米原市伊吹町上野他	琵琶湖最高所の水源で、水源祭祀が色濃く残る	2

2 生活文化の母体としての琵琶湖					
本文	資産名称	種別	所在地	概要	関連する要素*
	石山遺跡	埋蔵文化財	大津市石山	縄文時代早期の淡水貝塚	
(2)-①	粟津湖底遺跡	埋蔵文化財	大津市粟津地崎湖底	縄文時代早期から中期の淡水貝塚	
	大中之湖南遺跡	史跡	近江八幡市安土町大中	弥生時代中期の農業集落・古代の港湾施設	
	西野水道	県指定史跡	長浜市高月町西野	湛水災害を防ぐための掘削された放水隧道	
	海津	重要文化的景観	高島市マキノ町海津(他)	湖岸の生活文化を示す景観	3
(2)-②	針江	重要文化的景観	高島市新旭町針江他	湧水を利用した生活文化の景観	
	近江八幡の水郷	重要文化的景観	近江八幡市白王他	内湖の水郷景観	3
(2)-③	沖島	景観	近江八幡市沖島町	琵琶湖の漁村景観他	1・3
	菅浦・大浦	景観	長浜市浅井町大浦・菅浦	湖岸の集落景観	3
	漁業景観	景観	琵琶湖一円	多様な内水面漁業景観	
(2)-④	琵琶湖の固有魚種	(天然記念物)	琵琶湖一円	琵琶湖の漁業を支える魚介類	
(2)-⑤	湖魚のナレズシ（フナズシ）	滋賀県選択文化財	県内一円	琵琶湖の食文化を代表する湖魚を素材とした発酵食品	

3 湖上交通と水を介した交流					
本文	資産名称	種別	所在地	概要	関連する要素*
	荒神山古墳	史跡	彦根市日夏町他	琵琶湖航路を見下ろす前方後円墳	
	安土瓢箪山古墳	史跡	近江八幡市安土町桑実寺	琵琶湖航路を見下ろす前方後円墳	
	茶臼山古墳・小茶臼山古墳	史跡	大津市膳所平尾町他	琵琶湖航路を見下ろす前方後円墳	
	皇子山古墳	史跡	大津市錦織	琵琶湖航路を見下ろす前方後方墳	
	和邇大塚山古墳	埋蔵文化財	大津市志賀町小野	琵琶湖航路を見下ろす前方後円墳	
	若宮山古墳	県指定史跡	長浜市湖北町尾上	琵琶湖航路を見下ろす前方後円墳	
	春日山古墳群	史跡	大津市真野谷口町	琵琶湖航路を見下ろす古墳群	
(3)-①	古保利古墳群	史跡	長浜市高月町古保利他	琵琶湖航路を見下ろす古墳群	
	関津遺跡	埋蔵文化財	大津市関津	瀬田川水運の起点	
	石山寺境内	天然記念物	大津市石山寺	瀬田川水運の起点となる	4
	瀬田丘陵生産遺跡群	史跡	大津市山の神、草津市野路他	琵琶湖および瀬田川水運を介した古代生産遺跡群	
(3)-②	塩津港遺跡	埋蔵文化財	長浜市浅井町塩津	湖上交通の起点となった港および神社の遺跡	1
(3)-③	安土城跡	特別史跡	近江八幡市安土町下豊浦	織田信長が湖上交通掌握の中心とした城郭	1
	大溝城跡（打下城跡）	埋蔵文化財	高島市大溝	織田信長が湖上交通掌握のために築城した水城	
	佐和山城跡	埋蔵文化財	彦根市佐和山	織田信長が湖上交通の起点とした城郭	
	山本山城	埋蔵文化財	長浜市湖北町尾上	小谷城の枝城として琵琶湖湖上交通の掌握に機能	
	芦浦観音寺跡	史跡	草津市芦浦	中世琵琶湖水運を管掌した船奉行の館（寺院）	1
	彦根城跡	特別史跡	彦根市金亀町	徳川幕府の湖上交通掌握を表す城郭	
	近江八幡の町並み	伝統的建造物群保存地区	近江八幡市八幡	八幡堀、琵琶湖を介して活躍した近江商人の居住地	
(3)-④	琵琶湖疎水	史跡	大津市三井寺他	琵琶湖水運を京都まで延長しようとした土木工物	

4 芸術母体としての琵琶湖					
	資産名称	種別	所在地	概要	関連する要素*
	兵主神社庭園	名勝	野洲市中主町五条	水の祭祀に関連する平安時代の庭園を母体とする	1
	安食神社庭園	県指定名勝	豊郷町安食	水源祭祀に起源をもつ庭園	1
	玄宮楽々園	名勝	彦根市金亀町	琵琶湖の水を引き入れた庭園	3
	旧彦根藩松原下屋敷庭園	名勝	彦根市松原	淡水の汐入り式庭園	3
	居初氏庭園	名勝	大津市本堅田	琵琶湖と三上山を借景とした庭園	3
	慶雲館庭園	名勝	長浜市港町	琵琶湖を借景とした汐入り式庭園	3
(4)-①	近江八景	登録名勝	県下	日本を代表する名所景観	
(4)-②	義仲寺境内	史跡	大津市馬場	松尾芭蕉の墓のある寺院	

5 すべての要素を包括する資産					
	資産名称	種別	所在地	概要	関連する要素*
	琵琶湖	史跡	琵琶湖	近世に至るまで日本の経済を支えた運河として、世界的に希な湖底遺跡の存在等から史跡的価値があり、近江八景、数多くの芸術作品の舞台となった優れた景観美から、名勝的な価値があり、日本唯一の古代湖であり、多くの固有生物が生息することから、天然記念物的な価値があり、内水面を基とした漁業を始めとする景観には、重要文化的景観の価値がある	1・2・3・4
		名勝			
		天然記念物			
		重要文化的景観			
		埋蔵文化財			

*関連する要素とは「1 精神文化の母体」・「2 生活文化の母体としての琵琶湖」・「3 湖上交通と水を介した交流」・「4 芸術母体としての琵琶湖」の各要素を示す。

（5）全ての要素を包括する資産

ここでは、上記の要素の全てを包括する資産として「琵琶湖」があることを確認する。

3. 構成する資産とその概要（表1）

文化遺産としての琵琶湖は、上記のように、多様な性格の文化遺産群により構成される。現状で考え得る遺産群を表1に示した。これらの文化遺産群は、文化財保護法の保護の対象とされている文化財の内「記念物」を中心に抽出したものである。取り上げた文化遺産には、一部、指定および選定等の措置が執られていない文化財が含まれているが、これらは、まだ指定・選定には至っていないものの、価値的にはそれに値するものである。

なお、通常、文化遺産を構成する資産群には、有形文化財の内「建造物」を含める。しかし、本稿では、特に必要な文化遺産以外は取り上げなかった。また、史跡等に指定されているエリア内にある建造物も、棟数が多数に及ぶため、個々には取り上げなかった。

表にあげた、全ての資産について「水」との共生の視点から概説すべきではあるが、紙数の関係もあり、特徴的な資産の概要を記し、その価値を分析することとする。また、表中、記述の対象とした文化財には注記している。

（1）精神文化の母体としての琵琶湖

①比叡山延暦寺（写真1）

比叡山延暦寺は「古都京都の社寺」として1995年に世界遺産リストに登録された。この際の評価は、あくまでも、京都を構成する社寺建築と同じ文脈での評価であるが、本稿では、文化遺産としての琵琶湖を構成する大きな要素として評価する。

比叡山延暦寺は、言うまでもなく伝教大師最澄が開いた寺院である。最澄は、琵琶湖の湖上交通に深く関わった、渡来人系の氏族である三津首百枝の子として、比叡山の麓、坂本で神護景雲2年（766）に生まれた。誕生に際し百枝は、子供が授かるよう比叡の神に祈願したという。最澄は15才で得度し、19才で東大寺の戒壇で具足戒を受け国家公認の僧侶となるが、突然比叡山に隠棲し修行の末、延暦7年（788）、後の延暦寺の前身となる一乗止観院の造営に着手し、この本尊として自刻の薬師如来を安置する。

最澄の思想は、比叡山に籠もり修行することを決意した際に書かれたという「願文」に良く現れている。願文には「修行は、生きとし生きるもの全てに幸福をもたらすために行う」と、その理想と目的を掲げている。生きとし生きるものとは、当然のことながら人間のみならず、自然界の生き物全てであり、最澄が、人間もまた自然界の生き物の一員であることを強く意識していたことを窺わせる。

最澄がこのような思想を持つに至り、比叡山にこれを具現化しようとした背景には、琵琶湖とこれを取り囲む山々

の存在があったと考えられる。

生きとし生きるもの全てに必要なもの、それは「水」である。近江の地勢を見たとき、近江一国が、ほぼ琵琶湖を構成する水系に収まることに気づく。近江に降り注いだ雨は、川となり、ほぼ全てが琵琶湖に入る、まさに「水の小宇宙」とも言うべき国が近江である。そして、琵琶湖の中には多くの命が溢れている。最澄以前においても、琵琶湖の水源である山々、川、そして琵琶湖自身に対する、アニミズム的な信仰があったであろう事は、想像に難くない。このことは、葛籠崎湖底遺跡等、多くの遺跡の調査成果や、現在に伝わる生活文化や行事が、雄弁に物語っている。

最澄が、己の理想を具現化するためには、これを祈る「カミ」が必要であった。そしてそのカミとして選ばれたのが薬師如来である。最澄は、天台宗の根本如来として、薬師如来に至った。その理由は以下のように考える。

薬師如来は水の世界のカミであること 薬師如来は、正確には薬師瑠璃光如来であり、瑠璃すなわち青の世界、水の世界のカミである。特に我が国においては、山の薬師とともに、海の薬師に対する信仰が根強く伝えられている（五来1986）。以下、五来重の分析を元に概述する。

薬師如来は海上の他界から寄り来るカミであり、この他界とは龍宮でもある。従って薬師は龍神とも同一視される。また、同じく海から寄り来るカミである少彦名命とも習合する。少彦名命は医薬の神でもあり、ここにおいて薬師が生まれる。よって、少彦名命の本地仏は薬師如来となる。海と薬師如来の関係は、京都の因幡薬師や、出雲の一畑薬師の例を代表的なものとし、特に海岸部に広く見られる。また、龍宮との関係から龍女、弁才天とも習合する。

このように、海と薬師は強い関係があるというが、琵琶湖との関係はどうであろうか。琵琶湖の呼称は近世に入って定着したものであり、多くは「大湖」、「うみ」と称される。現在でも滋賀県民の多くは琵琶湖を「うみ」と称する。また、琵琶湖の中に他界（龍宮）があったことは、俵藤太伝説が雄弁に物語っている。俵藤太伝説が記された『太平記』や『御伽草子』は中世の作品であり、少なくともこの時代の人々は、琵琶湖の中に他界があると認識していたと考えられる。そして、これは、当然のことながら「うみ」を司るカミの世界であり、このカミとは仏教伝来以前から棲むアニミズム的なカミである。

このカミを仏教大系に組み入れたのが最澄と考える。このことは、多くの湖中出現の薬師如来伝説から推察される。

【桑實寺縁起】（近江八幡市安土町）天智天皇の娘が病を得て、その快癒を祈願したところ、琵琶湖の中から忽然と薬師如来が出現し、病を治した。この薬師如来を祀ったのが桑實寺である。

【石津寺縁起】（草津市）最澄が、自ら刻んだ薬師如来を天狗に命じて比叡山より投じたところ、矢橋の沖合に至り、ここに靈光を發した。これを祀ったのが石津寺の本尊

であった。この薬師如来は、江戸開府にあたり、東叡山寛永寺に遷されてしまった。

【聖衆来迎寺伝来薬師如来】(大津市) 最澄自刻の像と伝えられる。坂本の沖合から引き上げられてという伝承を持つ。

【西明寺縁起】(甲良町) 僧三修が湖西を歩いていると、対岸に靈光を見た。琵琶湖を飛び越え光の源に至ると、そこには池があり、三修が祈ると、池の中から、日光月光、十二神将を従えた薬師如来が出現した。

【謡曲白髭】 この謡曲は、延暦寺開山のいわれを、近江の地主神である比良明神と、琵琶湖のカミである薬師如来との交渉を通して語っている。概略は以下の通りである。

昔、兜率天で修行をしていた釈迦如来が、仏教を広める地を探して日本にやって来た。そして適地（比叡山と日吉大社）を見つけ、この地を、琵琶湖で釣りをしていた比良明神に無心する。しかし、比良明神は「自分は、ここで七千年釣りをしている主であり、仏教聖地になって、釣りができなくなるのは困る」と難色を示す。その時、忽然と琵琶湖から薬師如来が出現し、「自分は、比良明神より長い二万年琵琶湖に棲んでいる。仏教を広めることは良いことであるから、お前（釈迦）に彼の地を与えよう」と告げて比叡山と琵琶湖に分かれた。

特に、謡曲白髭で語られる世界が象徴的である。釈迦を最澄に、薬師を琵琶湖のカミに置き換えれば、最澄が琵琶湖のカミを自分の思想の中に取り入れていった過程が、良く理解できる。そして、このことを物語るように、比叡山の守り神である日吉大社のうち、大津宮遷都の際に、大和から迎えた、外来の神である大宮の本地仏は釈迦如来であり、比叡の神を祀る、在来の神である二宮の本地仏は薬師如来である（(1)－③日吉神社境内）。

このように、琵琶湖から出現する薬師如来の伝承は、琵琶湖に、水の神としての薬師如来の棲む世界があることが、意識されたことを示している。

薬師如来は太陽神であること 最澄の理想と薬師如来の関係を見るとき、薬師如来の持つ、もう一つの性格に言及しなければならない。その性格とは、薬師東方浄土に由来する、太陽神としての性格である。薬師浄土があるとされる東方は、言うまでもなく朝日の昇る方向であり、瑠璃光如来は、水の色と共に、空の色もあわす。阿弥陀西方浄土が、落日に象徴される「死」の世界であるのに対し、薬師東方浄土は、朝日に象徴される「生」の世界である。朝日は夕日となって沈んでも、翌日、朝日として復活する。これは命の輪廻を象徴する。それ故、薬師如来の脇士には一日を象徴する日光、月光菩薩が従い、眷属として一年、暦を象徴する一二神将が従う。これらのことは薬師如来が輪廻し、復活する時間を司るカミであることを示す。そして、薬師如来は、輪廻を通した命の永続を司るカミとして意識されることになる。

命を生み出す水のカミとしての薬師如来と、命の再生を司る太陽神としての薬師如来を合わせたとき、最澄の理想を具現化する新たな神として、薬師如来が誕生した。

比叡山の東に広がる琵琶湖は、まさに薬師東方浄土であり、比叡山に向かって昇る朝日は、琵琶湖と共に、全ての生き物の命を支える象徴として映った。この命の誕生と、再生を可視的にしかも体感できる環境は、琵琶湖と比叡山をおいて他になく、最澄がここに一乗止観院を創建したことも必然であった。よって、平安後期の歌謡集である梁塵秘抄では琵琶湖を「天台薬師の池ぞかし」と表現している。そして、琵琶湖の周辺には多数の天台系寺院が建立され、琵琶湖を見守るように薬師如来が祀られることになる。滋賀県内に伝来する（文化財指定された）薬師如来の数が全国最多であることが、この過程を良く表している。

インドで生まれ、中国を経由して日本に伝来した仏教は、琵琶湖に出会い、このカミと習合することにより、新たな仏教大系を生み出した。この意味に於いて、琵琶湖と比叡山延暦寺は、国際宗教である仏教の到達点として、評価することができる。そして、最澄がもたらした「生み出す」思想は、比叡山から鎌倉新仏教を築立たせ、現在の日本人の宗教観を形成するに、多大な影響を与え続けている。この思想は、後述（(3)－③安土城）するように、また、織田信長の思想を経て、徳川家康に受け継がれ、現在の東京のグランドデザインに反映されている。さらに、比叡山から生まれた、水と命の輪廻（循環）の思想は、延暦寺の宗教活動を通して、世界に向かって発信されつつある。

②葛川明王院および比叡山（写真4）

前述の通り、琵琶湖は、近江に生まれた水が集まる聖地であり、ここに、水の浄土とも言うべき薬師如来の世界が生まれ、これを中心とする文化が形成されてきた。

これに対して、水（生命）の誕生に対する文化も、色濃く伝えられている。これを代表する文化遺産が、葛川明王院と回峰行の行場である。

葛川明王院は、相応（831～918）により開かれた、天台回峰行の修行場である。回峰行は、行者自らが不動明王となり、衆生を救うことを目的とする行である（景山1976）。行は、山川草木に祈りを捧げながら、比叡山中の30km以上にも及ぶ道をひたすら歩くものであり、これを延べ千日間も続ける、超人的な千日回峰行が特に有名である。

回峰行の祖である相応は、延暦寺薬師如来の夢告により、回峰行を始めたと言えられる。そして、比良山中に行場を求めて彷徨していた際、シコブチ神の眷属に導かれ、葛川の奥、三之滝に至る。そして滝壺の中に生身の不動明王を感得し、これに抱きついたところ、不動明王は桂の古木に変じた。この古木を引きあげ、三体の不動明王を刻み、葛川明王院、比叡山無動寺谷明王堂と、琵琶湖の対岸にある伊崎寺の本尊としたと伝えられる。

この縁起の中では、滝と不動明王の関係が語られている。

近江のみならず、人里に近い滝に、不動明王が祀られることが極めて多い。所謂、修験道の滝行の場として、不動明王が祀られていると理解される場合が多い。しかし、「滝」を虚心に見てみたとき、滝は天から水が降臨する場所に見える。そして降臨した水は滝壺に交わり、里（人間界）に流れ出る。すなわち滝は、水の命が誕生する神聖な場所なのである。それ故、滝の周辺には、龍王や不動明王が祀られることになる。龍王は水の神であるから、滝に祀られることは容易に理解できる。不動明王が祀られる理由は、滝と滝壺の関係から理解できる。天から落ち来る滝は水の男性軸であり、これを受け止める滝壺は水の女性軸なのである。男性軸と女性軸の交合により新たな命が生まれる。この男性軸のカミが不動明王であり、その象徴が不動明王が必ず持す「劔」である。それ故、滝の近くに不動明王が、命誕生の象徴として、祀られることになる。所謂、滝行も水による浄化や、身体を酷使する苦行ではなく、滝に打たれ、水の命を身につけることにより、行者自らが再生する、或いは、衆生を救う新たな力を身に宿す、という意味があると考えられる。近世初頭に作成された、那智参詣曼荼羅では、那智の滝に打たれ苦行する文覚上人の元に、迦楼羅炎となった不動明王が降臨し、眷属の童子に支えられる文覚上人が、明らかに幼児化している（再生）している様が描かれている。

葛川明王院で行われる行に、夏安吾と呼ばれる、行者の参籠行がある。この中で、葛川の住民と行者により、太鼓廻しと呼ばれる行事が執り行われる。これは、明王堂の外陣で、村の若者が回す、巨大な太鼓の上に行者が乗り、ここから、外陣床に向かって飛び降りるというものである。若者達がかき鳴らすササラの音と、打ち鳴らす太鼓の音は、相応が不動明王を感得した三之滝の水音をあらわす。修行僧は不動明王になるべく（滝壺に）飛び降りる。不動明王を目指す行者は、（滝壺に）交わることにより、新たな命を生み出し、また一步、生身の不動明王に近づくのである。この一連の心象を象徴した行事が太鼓廻しである。

同じく、比叡山の回峰行者が行う行に、伊崎の竿飛びがある。伊崎寺は、相応が刻んだ不動明王を本尊とする寺院で、湖岸に迫る岩山に建つ。行は、行者が岩山から突き出た竿を渡し、ここから琵琶湖に飛び込む、というものである。この行も、葛川明王院と同じ構図を持つ。すなわち修行僧は、不動明王の化身であり。彼らが、母なる琵琶湖の胎内に飛び込み、新たな命を生み出すのである。

葛川明王院や、比叡山で行われる、天台修験は、修行により自然の精を身につけ、以て、利他する行であり、その根源には、自然に対する崇敬という、アニミズム的な心象が流れている。この心象を可視的かつ体感的に現すものが葛川明王院と比叡山である。

③日吉大社境内（写真2）

日吉大社は、大津市坂本本町に坐す。比叡山の守護神と

して崇敬され、平安時代以降は、共に平安京の表鬼門守護、仏法守護、国家鎮護の神として、幅広い信仰を集めて来た。延暦寺創建時から、日吉大社は、比叡山延暦寺と不離一体の関係にあった。長治2年（1105）、延暦寺の衆徒が、日吉大社の御輿を奉じて大内裏陽明門に至った。以後、山門強訴のうちに、日吉御輿の動座が頻発するようになり「天下三不如意」の一つとされたことが、この関係を端的に物語っている。しかし、慶応4年（1868）、日吉大社は新政府の意を受け、強硬な神仏分離を実施し、神社内にあった多くの仏像、經典類を破却し、この過程で延暦寺との実質的な関係を断ち、現在に至っている。ただ、日吉山王祭に、天台座主が臨席し、神前読経する行事に、その片鱗を垣間見ることができる。また、境内の祀られる多くの神は、比叡山の回峰行における礼拝の対象ともなっており、ここにも、延暦寺との関係を見ることができる。

現在見る事ができる境内景観は、元亀2年（1571）の、織田信長による比叡山焼き討ちによる壊滅的打撃から、豊臣、徳川政権の手により復興した社殿群である。

日吉大社の祭神は、大きく二つのグループに分類される。一つは、西本宮を中心とする、外来の神々を祀るグループで、天智天皇の大津宮遷都に際して、奈良三輪山から勧請した、大己貴神を祀る西本宮（旧称大宮）を中心として、宇佐宮、白山姫宮の三社からなる。これに対して、東本宮を中心とするグループは、古事記に「近淡海国之日枝山」に坐す「大山咋神」と表現されている、比叡山に坐す在来の神々を祀るもので、東本宮（旧称二宮）、樹下宮、三宮、牛尾宮の四社により構成される、外来系の神三社と、在来系の神四社を合わせて、山王七社と称される。この七社を上社とし、これに中七社、下七社を加えた、山王二一社も境内に祀られている。その他、社内百八社、社外百八社とも言われる摂社末社、霊蹟が多数有り、その規模は、伊勢神宮が所管する百二十五社を凌駕するものである。（日吉大社2009）

現在の祭祀の中心は、外から勧請され、より中央的性格の強い、西本宮が中心となっている。しかし、日吉大社最大の祭礼である、日吉山王祭においては、東本宮系の神に対する祭祀が中心となっており、日吉大社の本源が、在来の神々にあることを示している。

日吉山王祭の祭礼は、山に宿るカミを里に降ろし、ここで、男女神の交合により、新たな命を生み出すという「みあれ」の神事であり、アニミズム的な神概念に基づく祭礼である（景山1976）。一般に、祀りにより「ある（生まれる）」命とは、穀霊と解されている。日吉山王祭の場合も、このことに大きな相違はないが、祀りにより「ある」命が、穀霊の更に根源をなす「水」であることを強く感じさせる。このことは、東西両宮の社殿構成と、祭礼の内容に良く現れている。

西本宮には、本殿を一周する溝が設けられている。建物

周囲に配される溝は、雨落ちの排水溝である場合が多いが、この場合は、境内を流れる大宮川の清流に堰を設け、ここから水を分水して、この流れを本殿の回りに巡らすという、雨落ちとは理解しがたい構造を持っている。そして、本宮を巡った水路は、下段の宇佐宮に至り、この社殿を一周し、更にその下段に位置する、白山姫宮の社殿を一周し、大宮川に合流する。

東本宮では、本宮背面に坐す大物忌社（本宮祭神の大山咋神の父神で、旧称大行事）の背後から湧き出る、大行事水と呼ばれる湧水を、大物忌社の社殿を巡る溝に引き入れ、これを一周させる。そして、小さな滝となって下段の東本宮に至り、この社殿を一周させ、更に降る。途中、伝教大師参拝のゆかりを持つ「亀の井霊泉」と呼ばれる井戸の水を加え、下段樹下宮の社殿に至り、これを一周する。この間、樹下宮本殿床下にある「霊泉」と呼ばれる井戸から流れ出る水が合流する。そして境内を去った水は、大宮川に合流する。

このように、東西両宮とも、主要社殿の周囲を水が巡る構造をとっている。その水源は、西本宮は比叡山から流れ降ってきた大宮川の水であり、東本宮は、比叡山の神体山である、八王子山から湧き出る水である。社殿を水が巡ることは、社殿を清めるという解釈も成り立つが、むしろ、里に向かって流れ出る水に対し、神々が新たな生命を吹き込み、その力を増すための水路構造であると考えられる。特に、樹下宮の床下にある霊泉は、この井戸（湧水）自体が、樹下宮の本体であることを暗示しており、ここから流れる水が加わることにより、水の力は、より一層強まるものと考えたのであろう。そして、ここから流れ出た水は、里坊を巡り、琵琶湖に至ることになる（(1)－④延暦寺里坊庭園群）。

日吉山王祭において、山王七社の御輿は、琵琶湖沖合に向かって船渡御し、唐崎の沖合で「粟津の御供」と呼ばれる神事を執り行う。行事の由来は、西本宮の祭神である、大己貴神の近江への勧請説話に由来するが、これは明らかに、比叡の神々と、琵琶湖の神との交流であり、両者が密接な関係にあることを示している。なお、この船渡御には、琵琶湖一円の、九浦の船が奉仕することとなっている。これは、近江内にある延暦寺領、日吉領との関係と思われるが、祭礼に琵琶湖一円が関与することは、日吉山王祭が、比叡山と、その麓の神だけの祭礼ではなく、近江全体の山と湖（うみ）の関係を象徴している、と、理解されていたのかもしれない。

日吉大社は、歴史的には比叡山延暦と同体であり、延暦寺や回峰行に見られる、水と命に対する祈り、さらには、山と琵琶湖との交流を可視的に示す資産群として評価される。

④延暦寺里坊庭園群（写真3）

穴太積みの石垣で名高い坂本には、数多くの、里坊と呼

ばれる寺院が建ち並ぶ。里坊とは、延暦寺で修行を終えた老僧が、その余生を過ごすために、山下の坂本に授る寺院で、信長の焼き討ち以降、整備されて来た。ここでは、宗教活動もさることながら、様々な文化活動が行われ、芸術文化のサロンのような役割も持っていた。

この里坊を特徴付けるものに庭園がある。現在、多くの里坊に江戸期まで遡ることができる庭園があり、この内、10カ所の庭園が名勝に指定されている。

この里坊庭園群の特徴は、流れの庭が中心となることである。多くの日本庭園は、中央に池を掘る池庭である。従って、池の水には大きな流れはない。しかし、里坊庭園群の場合、里坊群の西端（日吉大社に近い部分）と東端では30mほどの高低差があり、多くの水路が急流をなして、里坊群の間を流れている。この流れを利用したのが、里坊の流れの庭である。

この流れには二つの水源がある。一つは、比叡山から流れ出る権現川水系で、この上流には、最澄の比叡山開山伝承とも関係する霊瀑、蟻ヶ滝がある。

もう一つの水系が、日吉大社を流れる大宮川である。特に、この大宮川水系を利用した庭園の水利用が特徴的である。日吉大社の社殿群を巡り流れてきた水は、前述のように大宮川に合流する。そして、ここから右岸に取水され、里坊の中を流れ降る。旧竹林院庭園に入った流れは、蓮華院庭園に入り、さらに律院庭園の中を流れ、実蔵坊庭園を経、寿量院庭園に入る。この流れの分水は、薬樹院庭園を経て下流に降る。本流は更に降り、金臺院庭園を経て最後は琵琶湖に入る。複数の庭園による水利用の形態は、単に、庭園造形の技術的なもの、として捉えることも可能である。しかし、ここを流れる水が、比叡山に産まれ、日吉大社の神々の力を得た水であり（(1)－③日吉大社境内）、あえてこの水を取水していることを考えれば、一連の里坊庭園群の造形は、積極的に水に対する祭祀を機能させていた、と考えることができる。

庭園の起源には諸説があるが、三重県埋蔵文化財センター1992)に見られるように、庭園の起源は水に対する祭祀空間として解するのが適当であろう。とするならば、里坊庭園群の流れの造形もまた、比叡山で生まれた水に対する祈りが、その根底にあると考えるべきであろう。日吉大社で力を得た水は、里坊の庭園の中で荘厳され、さらなる力を秘めて琵琶湖に至るのである。

延暦寺里坊庭園群もまた、比叡山、日吉大社の水と命に対する信仰と同じ文脈で評価される。

⑤竹生島（写真5）

水の命を生み出す男性軸として不動明王をあげ、生み出す場所として滝をあげた((1)－①延暦寺境内・(1)－②葛川明王院)。

これに対して、水の命を生み出す女性軸として意識され、継承されたものが弁才天であり、その聖地としての竹

生島である。

近江の天台系の寺院では、本尊と共に不動明王が祀られる事例が多いが、更な多くの場合、弁才天も共に祀られる印象がある。延暦寺はもとより、桑實寺、西明寺、百済寺、善水寺、長寿寺等、正確な分析は行ってはいないが、何らかの因果関係を感じる。おそらく、この関係は、水を生み出す男性軸のカミの相手として選ばれたのが、女性神である弁才天である。という心象に由来すると考えている。

弁才天は、インドのサラスバティー川を神格化した女性神で、その前身が示すとおり、本体は水神である。また、五来重が指摘しているように、弁才天は、龍神、龍女、さらには薬師如来とも習合する（五来1986）。そして、前述したように、近江で予察される傾向として、不動明王と対に祀られることも、水の女性神として意識された神であるため、自然と、そうなったのであろう。

近江における、弁才天信仰の中心は竹生島である。竹生島は、元来、琵琶湖のカミを祀る神の島であったと考えられるが、海の神である宗像神の一柱、市杵島姫命を祭神とし、これが次第に弁才天と習合して行った。さらに、補陀楽浄土思想が加わり、観音信仰の聖地としても信仰を集めるようにある。

現在は、明治の神仏分離令により、弁才天を祀る宝巖寺と、市杵島姫命・浅井姫命・宇賀御魂命を祀る都久須麻神社に分かれている。

竹生島の弁才天は、中世に、五穀豊穡と食を司る宇賀神と習合し、独特の竹生島型の弁才天が生まれた。甲賀市飯道寺の縁起では、飯道山に棲む弁才天に、宇賀太子が妻問いする説話が語られており、この習合が必ずしも竹生島で発生したものではなく、ものを生み出す山の精としての女神と、農耕神との習合を求める素地が、広範に存在していたことを示している。

この竹生島型の弁才天は、八臂で劔等の持物を持ち、頭上に、鳥居と蛇体の宇賀神を載せるという特異な形を持つ。竹生島型弁才天が必ず持す劔は、不動明王の持す劔と、共通する思想に基づくものかもしれない。竹生島型弁才天は、五穀豊穡と天下泰平を祈る蓮華会に際し、毎年新調して奉納するという伝統があった。そのため、宝巖寺にはおびただしい数の弁才天像が伝来している。この中には湖北の戦国大名、浅井久政が奉納したとされる像も含まれ、この信仰が広範にわたっていたことを示している。

また、上記天台系の寺院に祀られる弁才天の多くが、この竹生島型弁才天であることも、天台宗と竹生島（琵琶湖）との、強い繋がりを示すものとして注目したい。

そして、これら天台系寺院での弁才天の祀り方には、共通性が見られる。すなわち、池を掘り、島を浮かべ、この島に弁才天を祀る方法である。比叡山無動寺谷弁財天のように、池の部分が白砂になり、象徴的に水を現す場合もある。これらの方法はとりもなおさず、琵琶湖と竹生島の関

係を縮小したものに他ならない。このような弁才天の祀り方を「琵琶湖型弁才天」と呼ぶこととする。

琵琶湖型弁才天は、極めて広範囲に分布しており、枚挙にいとまがない。天台系の寺院、或いは、過去に天台系寺院と習合していた神社等に多く見られるものの、全く異なる社寺、さらには、用水池等、直接信仰とは結びつかない所にも見ることができる。

この琵琶湖型弁才天の起源は不明であるが、後述（(1) - ⑥池の沢庭園遺跡）する庭園の起源とも、深く関わると考えられる。少なくとも、近世初頭に作成された多くの社寺参詣曼荼羅には、琵琶湖型弁才天の姿を見ることができる。

水神である弁才天に、水を祈願する場合、或いは弁財天として現世利益を祈願する場合、何れの場合も日本人は、祈願の装置として「琵琶湖」を必要としているのである。その典型例が、江戸「不忍池」の弁天堂であり、京都「神泉苑」の弁才天である。

このように、琵琶湖、竹生島弁才天は、日本人の水に対する信仰の基層を形成する資産として評価される。

⑥池の沢庭園遺跡（写真6）

高島市朽木村井にある庭園遺跡である。築庭の年代は鎌倉時代初期以前と考えられる（高島市教育委員会2010A）。

庭園は、安曇川本流と、左岸から流入する源田谷の合流部の西に広がる、安曇川本流を見下ろす段丘上に造られている。庭園は、段丘上に広大な池を掘り、池のほぼ中央に島を浮かべ景とする。池への水源は、庭の南西隅の湧水である。水口には築山状に大小の石を積み上げて景とする。湧水は池に入ると共に、庭の南に緩やかな流れを造り、滝となって安曇川に落ちる。流れの左岸には大型の景石により荒磯の造形をなす。更にその南に屹立する山肌には、縞のある奇岩を露出させ、これも庭の景をなしている。

この庭園の造営主体は、周辺部に藤原氏の荘園が分布することから、平安京の有力者と考えられている。この庭園の評価は以下の通りである。

現在、発掘調査により、多くの庭園遺跡が見つかってきているが、その庭園が機能していた時代の造形を、そのままとどめている事例はきわめて少ない。また、今日まで継承されてきている古庭園のほとんどが、長い年月の間に崩壊したり、改造の手が加わっている。このような中であって、池の沢庭園は、鎌倉時代初期の庭園の姿をほぼ完璧にとどめている。しかも、当時の水口の湧水までもが、今なお、機能した形で復元することができた希有な事例である。

また、池の沢庭園の立地は、安曇川と源田谷の合流部にある。滋賀県の山間部においては、河川の合流付近に神社が造営され、神祀りなされる事例が多い。これは、河川の合流により、水の力が増すことを神聖視したことによると考えられる。さらに、池の沢庭園自体が、湧水からの水を強く意識した造形となっている。湧水地もまた、水の命が

生まれるところとして、神祀りがなされる場所である。

池の沢庭園は、眼下に安曇川の流れを見、対岸の白倉山も景とし、また安曇川越しには、比良山系の主峰である武奈ヶ岳を望む景勝の地にある。ここにあって、池を掘り、島を浮かべ、浜辺を造り、流れを造形した。このことは、庭の造形が、単なる自然への憧憬や、自然美の再現といったものではないことを示している。これらのことから、池の沢庭園は、水に対する祈りの造形として理解することが妥当であろう。

安曇川の水は琵琶湖に注ぐ。平安京の人にとって、琵琶湖は景勝の地、祓えの地、経済を支える源として強く意識されていた。当然、その水源の地には、深い畏敬と憧憬の念が払われていたであろう。そして、その水源に対する祀りを行うに相応しい地として、この場所が選ばれた。

池の沢庭園は、庭園内に湧水の水源があり、これを築山で荘厳している。このことは、ここから給水される水が淡水である事を意識していると考えられる。とするならば、ここから流れ出る水が川であることは、当然のことであるが、水の入る池もまた、淡水であり、大海原の造形ではないと考えられる。ここから流れ出た水が安曇川に入り、琵琶湖にはいるわけであるから、池の造形は淡水の池である。そして、ここに島の造形が成される。池に浮かぶ島の造形は、琵琶湖と竹生島を模したものと考えることもできる。すなわち、水を祀る装置として「小さな琵琶湖」を意識したのではないか。池と島の造形。これは日本庭園の骨格をなす造形である。池の沢庭園の造形が、小さな琵琶湖を意識したものであるならば、日本庭園の造形の底流にも琵琶湖の景観と精神性が流れていると考えられる。

池ノ沢庭園は、水源に対する信仰と、信仰に基づく造形としての庭園の起源を考える上で、重要な資産として評価される。

（2）生活文化の母体としての琵琶湖

①粟津湖底遺跡（写真7）

大津市晴嵐一丁目地先の湖底に所在する、縄文時代早期から中期にかけての遺跡である。これまでの分布調査により3カ所の貝塚が確認されている。このうち、最も規模の小さい第3貝塚について全面的な発掘調査を実施した（滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会1997・2000）。

調査の結果、セタシジミ（琵琶湖の固有貝類）を主体とする貝層に加え、通常の遺跡では分解し遺存しない、トチを始めとする、堅果類の外皮（殻）が大量に出土した。湖底にあるという希有な条件下、有機質が分解せずそのまま遺存していたのである。そして、これらの食物残滓を分析した結果、少なくとも、この遺跡が語る、縄文時代早期から中期にかけての縄文人の摂取食料は、大きく植物に依存していたことが明らかとなった。

さらに、食物残滓の堆積層位および、出土したセタシジミの成長線分析による、食物採取の季節性の分析の結果、当時の人間は、季節毎に、最も有利な（得やすい）食料を選択して摂取していた様子が明らかとなってきた。堅果類が秋に集中するのは当然のことであるが、フナ・コイ類の摂取は、産卵のために接岸する春から初夏にかけての間に集中し、シジミは春から夏にかけて集中して摂取されている。これにより、フナ・コイ類に関しては、最も効率よく漁獲できる季節に、集中的な漁撈活動を行っていたことが明らかとなった。一方、セタシジミであるが、この季節は、貝の身が一番太る季節ではあるが、移動性に乏しい貝類は、採取を指向すれば周年採取できるはずである。この、特定季節に採取が集中する傾向は、採取時期に対する選択性が、強く働いていたことを示している。この選択性が、所謂、「旬の味覚」に規制されたものなのか、単に、水中での作業に適した水温に規制されたものなのかは、明らかにはしがたい。いずれにしても、季節を限った採取は、セタシジミの成長を促し、貝塚には、現生のものに比してきわめて巨大なセタシジミの貝殻が厚く堆積していた。

粟津湖底遺跡から出土した食物残滓が示すものは、人間の食料採取の行為が、自然のサイクルに合わせていたこと。言い替えるならば、自然が「主」であり、人間が「従」である生活が、連続と続けられていたことを示している。

粟津湖底遺跡は、人間と琵琶湖の関係を具体的に示す最初の具体的な事例として評価される。

以後、1万年にも及ぶ、琵琶湖と人間の交渉の歴史が繰り広げられることになる。

②針江・深溝の水辺景観（写真8）

高島市新旭町針江地区に見られる湧水を取り入れた生活と、水の循環を示す景観で、2009年に重要文化的景観に選定された（高島市教育委員会2010B）。

針江は、隣接する深溝とともに、安曇川の伏流水が自噴する地域である。このため、これらの地区では、湧水を生活の中に取り入れた水文化が継承されている。その中で、最も特徴的なものが「カバタ」とよばれる井戸である。

カバタの内、家屋内に造られたものを「ウチカバタ」、家屋外に造られたものを「ソトカバタ」と呼んでいる。カバタの構造は、基本的にウチカバタもソトカバタも共通する。水が湧き出る部分をツボイケとよび、この部分の水は飲料水や洗顔に使う。ツボイケの周りを囲うようにナカイケを設け、この水は食器等、比較的きれいな物を洗うのに用いる。更にその外側にソトイケと呼ばれる広い囲いを設け、野菜等を洗うのに用いる。ソトイケには多くの場合、コイが飼育され、物を洗うことによって流れ出た、食物残滓や野菜屑を食べて成長する。当然、このコイは、人間の食料として消費されていた。カバタから流れ出た水は、河川に入り、河口の内湖に入り、琵琶湖に至る。また一部は

河川などから、水田用水として引水され、その排水も内湖に入り、琵琶湖に至る。琵琶湖の手前にある内湖では、上流から流れてきた汚れが沈殿し、清浄な水となって琵琶湖に流出する。そして湖岸には、現状の琵琶湖では最大規模のヨシ群落が形成されている。

また、このような、カバタ等の水利用の形態は、世界文化遺産に登録されている、中国雲南省麗江古城に見られる、湧水の水利用の形態である「三眼井」と共通する（朱2007）。ここでも、水の清浄度に合わせた水利用のルールが厳格に定められ、住民の生活を支えていた。

この水を利用して営まれる、水田稲作により生産された米は、集落に運ばれて消費され、藁もまた用具、肥料として消費される。湖岸に発達するヨシ群落は、琵琶湖の養分（＝上流からの汚染物質）を栄養として成長（浄化）し、このヨシは、屋根材を始めとする資源として、集落に運ばれ消費される。

さらに、琵琶湖からは、季節ごとに多くの魚達が遡上し、内湖および河川、水田で繁殖、成長し、降湖する。そして、これらの魚を多様な漁具、漁法により漁獲し、これを集落で消費する。

このように、針江地区では、水の誕生（湧水）から、その終点（琵琶湖）までが、水そのものと、水が基となり生産される様々な資源が、利用と浄化の思想により循環している。すなわち、家屋内での水利用と浄化、河川、水田での水利用、内湖での水利用と自然浄化、そして、ここから産み出される作物、魚介類、ヨシ等の自然資源である。そして、利用と浄化を経た水は琵琶湖に入り、さらに多くの命を育むことになる。

まさに、針江地区に見られる人間と水との関係は、節度ある利用と、自然の力にゆだねた浄化のサイクル（循環）が、持続的に継続され、それが住民、さらに外部から見たときも、心地よい生活と景観を形成していることを示している。

③沖島（写真9）

沖島は、琵琶湖に浮かぶ周囲約12kmの島で、近江八幡市に含まれる。現在、琵琶湖の島で唯一人間が定住している島である。淡水の湖の島で、人間が恒常的に生活している島は、世界的に見ても希である。現在約150戸、400人程の住民が生活している。平地に乏しい沖島では、港の周囲に殆どの家が集中し、まさに、軒を接して家が密集する特異な居住景観を見ることが出来る。

島に祀られている沖津島神社は、奈良時代に藤原不比等が勧請した多紀里比売命を祀っている。この当時、島には人間は住まず、ただ神のみが祀られていたという。

沖津島神社の祭神である多紀里比売命は、対岸の大島・沖津島神社の祭神である奥津比売命と同神で、玄界灘の航路を護る、宗像三神の一柱である。このことは、琵琶湖の航路が、日本と大陸を結ぶ玄界灘の航路と同様、古代国家

にとって最重要航路であったことを暗示している。さらに、竹生島にある都久夫須麻神社の祭神も、宗像三神の一柱である、市杵島姫命であることも、古代国家の琵琶湖航路に対する評価を窺わせる。

現在の住民の祖先は、島の伝承によれば、近江源氏の残党源満仲の家臣、南源五郎以下、七人の源氏の落ち武者の子孫達であるという。

沖島は、ほぼ全島が岩塊により構成されており、沖島から切り出された石材は、国鉄東海道線、琵琶湖疏水等の建設に利用され、明治期の日本に発展をもたらした、国家的土木工事を支えてきた（(3)－④琵琶湖疏水）。現在も、島の西岸には当時の石切場の景観が良好に残されている。

また、沖島には川はなく、湧水にも恵まれていないことから、生活水の殆どを、琵琶湖から得る生活を近年まで続けてきていた。この中で、飲料水、食器洗い、汚れ物洗い等、琵琶湖に対する汚染負荷の度合いにより、取水、あるいは、利用する水面を厳格に区分していた。このことは、前述の針江のカバタの利用形態に通じるものであり（(2)－②針江・深溝の水辺景観）、自然水の利用と、人間生活の関わりを考える上で重要な示唆を与えてくれる。なお、沖島は滋賀県でも最も早く、上下水道が整備された地区であることも、沖島の住民が琵琶湖の水に抱く感情を、端的に表している。

沖島の主な生業は、社会情勢の変化により衰退しつつあるが、漁業である。沖島の漁業を代表する漁法に地曳網漁がある。現在では、積極的には行われてはいないが、近年まで、沖島の周囲および、対岸で盛んに行われていた。沖島の地曳き網漁は、湖西北部で行われていた地曳き網漁が、ヒウオ、コアユを対象としたものが多かったのに対し、コイ、フナ等の大型魚を対象とするものが主力であった。

現在の漁業の中心となっているのは、アユやビワマスを対象とした、コイトアミと呼ばれる刺し網漁、イサザ等底地性の魚を獲るチュウビキと呼ばれる曳き網漁、ウナギを対象としたナガシバリと呼ばれる延縄漁、エリ漁等、季節毎、対象魚種毎に、多様な漁具漁法を駆使した漁撈活動が営まれている。漁業の中核施設である沖島漁港は、琵琶湖総合開発により、その景観を一変させてしまったが、係留される多数の現役漁船、漁港周辺で手入れされる多種多様の漁具が作り出す景観は、大津市堅田港と共に、琵琶湖を代表する漁業景観であり、琵琶湖の漁業を可視的に体感できる空間として、高く評価される。また、本格的な内水面漁業が、衰退している我が国にあっては、かけがえのない景観として、動的に維持して行く必要がある。

沖島は、琵琶湖の湖上交通に関する祭祀に始まり、琵琶湖を代表する漁業の景観を今に伝え、さらに、水利用の文化、淡水の湖に浮かぶ島という希有な環境下での居住形態を伝える、琵琶湖の文化が凝縮されている空間である。

④琵琶湖の固有魚種および湖魚のナレズシ（写真10～12）

400万年もの古い歴史を持つ琵琶湖は、他に例を見ない豊かな生物相を育ててきた。琵琶湖に生息する固有種は50種以上とも言われるが、その中でも魚類は15種の多さを数える。これらの固有魚種は、生物学的に、貴重な存在であることは言うまでもないが、他の魚類と共に、文化遺産琵琶湖を構成する、重要な要素として評価する必要がある。

前述の栗津湖底遺跡（(2)－①栗津湖底遺跡）で概述したように、琵琶湖周辺の人間にとって、琵琶湖に生息する魚は、重要なタンパク源として利用され続けてきた。特に、古代から近世にかけては、近江国内の需要をまかなうだけではなく、供御人として朝廷や有力神社へ魚を供進する他、平安京の魚需要を満たすために漁撈活動が拡大して行った。

また、近江国内では、豊かな水産物と米が結びついた、独特の食文化が形成され、現在まで継承されている。この内、最も特徴的なものが、フナズシを始めとする湖魚のナレズシである。ナレズシに関しては、メコンデルタ地帯において水田漁業を構成する食文化として発生し、稲作の伝播とともに日本に伝来したとされているが（石毛・ケネス1990）、特に、琵琶湖において特異な発展を見せている。近江のナレズシは、以下のように評価される（大沼2009）。琵琶湖湖岸の水田開発に伴う環境の変化が、コイフナ類の繁殖環境を広げ、このことにより、水田漁業とも言うべき漁撈形態が定着したこと。さらに、水田内での稚魚の成育と稲の生育のシンクロが、「魚が琵琶湖から稲魂を運んで来る使者」という心象を生み、この魚と米が融合した聖なる食として「ナレズシ」が造られ、この心象が「晴れの日」にスシを食する」という、日本人の心象を形成している。

ナレズシは、日本人のソウルフードとも言うべき「スシ」の原型であり、ここから派生した多様なスシは、日本中に広まり、その地方独特の食文化を形成している。また、日本食を代表する料理として、海外の食文化に大きな影響を与えている。

この他に、近江には、ビワマスを用いた「アメノウオご飯」、ゲンゴロウブナを用いた「フナの子まぶし」、ハスを用いた「田楽」、ヒウオを用いた「釜揚げ」、ホンモロコ、コアユ、イサザ等の小魚を用いた「醬油煮」「鮎煮」「山椒煮」等の多種多様な湖魚料理が伝承されているが、その多くが琵琶湖の固有魚種を素材としたものであり、琵琶湖の持つ自然的な特性が、琵琶湖の文化形成に大きな役割を果たしていることを如実に示している。

琵琶湖の固有魚種、および固有種を始めとする水産資源を利用した多様な食文化は、節度ある自然の利用の重要性を、五感に訴えるものであるばかりでなく、世界の食文化に対し影響を与える、琵琶湖を代表する生活文化として評価される。

（3）湖上交通

①古保利古墳群

長浜市高月町古保利に所在する、古墳時代前期を中心とする古墳群である（高月町教育委員会1995）。この古墳群が立地する古保利丘陵は、賤ヶ岳から、山本山に至る細長い丘陵で、琵琶湖岸に衝立のように立ち上がる。古墳群は、この丘陵状にほぼ一列に132基の古墳が並んで築造されるという、特異な立地を示す。古墳群を構成する古墳には、前方後円墳8基、前方後方墳8基が含まれる。

これらの古墳は、丘陵の東、即ち平野部からは殆ど見ることができないが、丘陵西に広がる琵琶湖からは、その姿を仰ぐことができる。

丘陵の西に広がる琵琶湖は、古保利丘陵と、対岸の葛籠尾崎に挟まれた塩津湾と呼ばれる細長い湖面で、その最奥部に塩津港が位置する。塩津港は、古代から近世初頭にかけて、日本海から陸揚げされた物資が、畿内に向かって湖（うみ）を航海するための、要港であり、塩津湾は日本海と畿内を結ぶ、重要な琵琶湖航路である。そして、古保利古墳群は、この塩津湾を見下ろす位置に立地していることになる。

このことから、古保利古墳群の造営主体は、琵琶湖の湖上交通の掌握に関連した集団と考えられ、古墳時代前期における、琵琶湖湖上交通の重要性を視覚的に表すものとして重要である。

同様な、琵琶湖航路を見下ろす丘陵状に立地する古墳としては、表1にあげた荒神山古墳等がある。

②塩津港遺跡（写真13）

長浜市西浅井町塩津に所在する、古代から中世にかけての神社関連遺跡である。

塩津は、前述（(3)－①古保利古墳群）の通り、日本海（北陸）と畿内を結ぶ流通の要衝であり、琵琶湖航路の北の起点として最も重要な港である。塩津港遺跡から発見された神社遺構は、11世紀から12世紀にかけて機能した、2カ所の神社遺構であるが、その周辺および、下層からは、更に時代の異なる神社遺構が確認されている。特に、12世紀代の神社遺構の下層には、8世紀代の奈良三彩、人型木製品等を含む層位と柱穴が確認されており、この時代の神社遺構が残されている可能性が極めて高い。また部分的に7世紀代の遺物を包含する層位も確認されており、更に古い段階の神社（祭祀）に関する遺構が遺存している可能性がある（横田2011）。

この神社の性格であるが、神社を取り囲む堀から見つかった、大量の起請文木簡の内容が端的に物語っている。起請文木簡は、板に神に対する起請文を記した大型の木簡で、最大のものは長さ210cmを計る。

起請文の内容であるが、解説できたものは何れも、当時の運送業に携わる人物が、契約（約束）通りに荷物を運搬することを誓う内容である。また、「海運守護」と記され

た木簡も含まれている。このことから、この神社は、湖上航行の安全、積み荷の安全を司る神として祀られていたことが解る。また、ここからは、単に航行、積荷安全の祈願だけでなく、物を移動させること自体が神聖な行為であるという、当時の精神世界の一端を垣間見させてくれる。

その他、出土した遺物には、大量の土師皿が含まれるが、何れも京都系の土器であり、祭祀の主体が平安京と強く関連することをうかがわせる。さらに、下層から部分的に見える遺物にも、平城京との関連を示唆するものが見られる。これらのことは、塩津港遺跡の神社が、古代国家の意志を強く反映させたものであることを示している。また、この遺跡に先行する時代の文化遺産ではあるが、前述の塩津湾を見下ろす古保利古墳群も、この文脈の中で評価すべきものである。さらに、前述（(1)－⑤竹生島・(2)－③沖島）のように、航路を下った竹生島、沖島に祀られる神が宗像神であることも、琵琶湖航路が国家維持の動脈として位置づけられていたことを示している。このことは、琵琶湖航路の南の起点である「大津」の地名が、大陸に向けての海上交通の起点であった、筑前大津（博多）と共通することからも窺い知ることができる。港湾都市としての大津の地名は、日本にこの2カ所しかない。古代国家にとって、琵琶湖航路は、大陸への航路と同等の価値を持っていたのである。

③安土城跡（写真14）

織田信長が、天下布武の拠点として築城した城郭である。総石垣による郭構成、瓦葺き礎石建ち建物による作事等、近世城郭の先駆けとして評価されている。

安土城の立地は、琵琶湖に繋がる大中之湖、弁天内湖、伊庭内湖の広大な内湖に突き出た半島上にあり、三方を湖に囲まれた水城である。安土城に関する軍事的、遺構的な評価は既に多方面からなされている。

ここでは、琵琶湖との関わりを持つ二つの視点から評価する。一つの視点は、湖上交通の掌握であり、もう一つの視点は、精神的統治の柱として継承し、発展させた、琵琶湖を浄土とする天台薬師の思想である。

湖上交通の掌握 信長は、早くから琵琶湖湖上交通の重要性に着目し、元亀2年（1571）、佐和山城を手に入れると、元亀4年、麓に広がる松原内湖において「大船」の建造に着手する。その大きさは約54mにも及び、おそらく、当時の世界最大級の船舶であった。この大船の評価に関しては、「琵琶湖の環境を無視した、実用に耐えない代物」という評価もあるが、船の実態としての機能はともあれ、琵琶湖に大型の船を浮かべ、大量の人員を輸送するという信長の思想は、琵琶湖航路の持つ重要性を十分に認識した行為として、積極的に評価される。

また、信長は、琵琶湖岸に、元亀2年（1571）に坂本城を、天正元年（1573）に長浜城を、天正6年（1578）に大溝城を相次いで築城する（中井1997）。これらの城郭は何れ

も、琵琶湖に接した水城であり、琵琶湖の湖上交通の要所を扼する位置に築城され、信長家臣団の中でも最も有能な武将が城主として配置されている。

すなわち、坂本城は、琵琶湖航路の南の終着地点であり、琵琶湖航路を経た物資が陸揚げされる、当時の日本で最も重要な湊であった。坂本を長く支配していたのは比叡山延暦寺であり、元亀2年に比叡山焼き討ちを敢行した後、直ちに坂本城を築城している。坂本城の機能として比叡山に対する監視という機能もあるが、最も大きな機能は坂本港（大津港）の掌握にあったと考えられる。坂本城には城主として明智光秀が配される。

長浜城は、小谷城主となった羽柴秀吉が城主となって築城した城郭である。小谷城は、北国脇往還を押さえる要城ではあるが、湖上航路を押さえるには内陸に入りすぎている。このため、湖岸の今浜（現在の長浜）に新たな城郭を築城したと考えられる。長浜は、北陸方面からの物資が集積する塩津港を始め、中京方面からの物資が集積する、朝妻港を押さえるためには絶好の位置にある。

大溝城は、若狭方面からの物資が集積する、古代からの要港である勝野津を始め、北陸からの物資が集積する海津、今津の各港を押さえる位置にある。ここには、信長の甥の織田信澄を配置した。

そして、これら三城を束ねる要の城として、安土城が築城されたのである。信長が近江に築城した領国経営のための城郭はこの四城だけであり、この何れもが、琵琶湖に接した水城であると言うことは、信長の経済戦略あるいは軍事戦略上、琵琶湖の掌握が、最も優先すべき事項であったことを物語っている。

信長の琵琶湖に対する戦略は、秀吉の坂本城、大津城の築城、そして徳川幕府による彦根城、膳所城の築城に継承される。特に、彦根城、膳所城とも幕府による天下普請により築城されたという事実は、徳川政権にとっての琵琶湖の重要性を如実に物語っている。一国に、天下普請により整備された城郭を複数持つのは、近江しか無く、しかもその全てが水城である。

安土城は、湖上航路を経済的、政治的に掌握しようとした信長の戦略を具体的に示すものとして評価される。彦根城、大溝城、山本山城等、遺構的に良好に残されている湖岸の城郭も、造営主体は異なるが、安土城と同じ文脈で評価される。

天台薬師の思想と信長、安土城 元亀2年に敢行された比叡山の焼き討ちから、信長は、天台宗と敵対したという評価が良くなされるが、これは否定されるべきである。信長は、安土城に隣接する天台寺院である桑實寺の復興に尽力しており、境内に大師堂を建立している。大師とは天台大師と伝教大師であり、「天台宗ノ祖師ナルカ故ニ崇敬ノタメニ安置シ玉ウ・・・」との表現がある（北川1988）。また、比叡山と共に信長の焼き討ちに逢い、壊滅的な打撃を受け

たという百済寺に関しても、信長は、焼き討ちの直前に百済寺に逗留しており、宗教者としての百済寺と敵対した様相はない。焼き討ちの引き金となったのは、百済寺が六角氏に与し、軍事的に信長と敵対したためである。延暦寺への焼き討ちも、同様に軍事的、経済的に信長と敵対したため排除したと考えるべきであろう。

また、安土城の構造を見たとき、ここに強い宗教性を見て取ることができる。秋田裕毅は、城内惣見寺の分析から織田信長は「神」になって日本を統治しようとしたと主張した（秋田1992）。筆者は基本的に秋田の主張を踏襲するが、信長がなろうとした神とは、前述（(1)－①延暦寺境内）の最澄が観じた、琵琶湖のカミである「薬師如来」がモデルになっていると考える。詳細は別稿に譲るが、それは、以下の遺構及び信長の行動の分析に基づく。

(i) 城内および城下町内の薬師如来に関わる社寺を保護していること。

城内にある石部神社は、安土城築城以前から存在していたが、築城に際して排除させることなく、存置されている。この神社の祭神は少彦名命であり、その本地仏は薬師如来である。

城下町にある沙沙貴神社は、信長と敵対した佐々木六角氏の崇敬篤い神社であるが、信長により保護され、現在に至っている。この祭神も少彦名命でありその本地仏は薬師如来である。

観音寺城に接して建つ桑實寺は、前述の通り天台寺院でありながら信長の保護を受けている。桑實寺は琵琶湖から出現した薬師如来を本尊とする寺院である（(1)－①比叡山延暦寺）。

安土城天主の西、天主の西に位置する高まりに展開する郭群は、「薬師平」と呼称され、江戸時代の絵図には「薬師山」と標記されている。この郭の構造は、中央路の両側に、防御性の乏しい平坦地を雛段状に連続させるものであり、安土城に伴う城郭構造というよりは、むしろ、近江によく見られる、中世期の天台系山寺の構造を示す。そして、ここに祀られていたという薬師如来の古像が、安土町内の「湖見堂」に伝えられている。この像は立像であり、延暦寺根本薬師像と共通する像容を持つ。

(ii) 竹生島弁才天を勧請していること

これは、秋田が指摘しているように、信長が、自ら竹生島から弁才天を勧請し、惣見寺の主要なカミとして祀ったものである。弁才天は、前述（(1)－⑤竹生島）のとおり、竹生島、ひいては琵琶湖の守り神であり、現在に至るまで篤い信仰を集めている。琵琶湖のカミを具体視させる上で最も、適切な神であろう。

(iii) 安土城および惣見寺をライトアップしていること

天正9年（1581）の信長公記に、信長は、安土城天主、惣見寺に多くの「挑灯を点じ、街道を続松で照らし、湖上にも続松を積んだ船を浮かべ、山下をおおいに輝かせた」

という記事が見える。この記事について「信長の派手好み」という評価がなされるが、灯火で飾った日は盆であり、湖上に灯火を浮かべる行為は、琵琶湖を意識したものと受け取れる。とするならば、これは、ウミの薬師如来に対する「龍燈」の奉賽に他ならない。五来重によれば、龍燈は、海辺で修行する行者が海の神である龍神（薬師如来）に献じた聖火に起源を持つという（五来1986）。そしてこの龍燈の伝統は、各地の火祭り、灯火祭、常夜灯へ受け継がれて行く。

信長が行ったライトアップは、うみ（琵琶湖）の神である薬師如来に対する、聖火献灯として捉えるべきであろう。そしてこの起源となったのは、勝幡城時代から信長が信仰していた、津島神社の天王祭における「巻藁」の奉賽では無からうか。信長の時代の天王祭の様相は不明であるが、現在の天王祭における巻藁は、365個の提灯と、その上に乗る12個の提灯で構成される、一年の周期を強く意識したものであり、その奉賽の対象は、言うまでもなく津島神社の祭神である牛頭天王（本地薬師如来）である。

(iv) 信長は馬印に日傘を用いていること

日傘は、太陽の恵みを受け止める神聖な用具であり、聖者、支配者の持ち物とされる。信長は、この日傘を自らの馬印としている。このことは、信長自らが、太陽の神でもある薬師如来の祝福を受けた者であることを、宣言しているものと考えられる。

そして、このことを象徴するように、安土城は叡山の西に築城されている。叡山の名称の起源は明らかではないが、花山上皇の時代には認められることから、信長の時代には、この名称が定着していたと考えて良い。安土城の立地は前述の通り、湖上交通を強く意識したものであることは間違いないが、それとともに、叡山を背後に持つことも意識されたのでは無からうか。西から安土城を見ると、朝日が叡山から昇り、安土城を照らす景観を見ることができる。安土城自体が、太陽のカミである薬師如来の祝福を受けていることを主張する立地であるとも考えられる⁽¹⁾。

(v) 信長神を拝する利益が、薬師如来十二大願と酷似すること

秋田が指摘しているように、日本における記録はないが、ルイスフロイスが報告した記録によれば、信長は自らを拝することを求め、拝する者の利益として、①富者になる。②子孫を得る。③長寿を得る。④病が癒える。としている。

これらは、強い現世利益を謳っているものである。この信長神の現世利益の内容は、薬師が如来となるにあたり誓った事項である、薬師十二大願の内容に酷似している。第三願「施無尽仏（全ての人々が必要なものを手に入れる）」。第六願「諸根具足（全ての人々の身体上の障害をなくす）」。第七願「除病安楽（全ての人々の病を除き窮乏から救う）」。第一願「飲食安楽（全ての人々が飢えや渇きがないようにする）」。第一二願「美衣満足（全ての人々に衣服を与え、

心慰める)」。である。

このように、信長が、薬師如来を意識する背景としては、織田家が、越前織田神社の神官の流れをくむこと、尾張時代の信長が、津島神社や、熱田神宮を崇敬していたことにある。これらの神社は何れも牛頭天王および素盞鳴命を祀る神社であり、これらの神々の本地仏は薬師如来である。

信長にとって、薬師如来を崇敬する素地があり、それが近江の本拠を構え、日本を統治するに当たり、最澄以来、連綿と形成されてきた「水の浄土琵琶湖」と、この盟主である薬師如来の思想に触れ、自らが薬師如来そのものとなり、若しくは、その力を背景に、日本を精神的に統治しようとする思想に行き着いたのであろう。

そして、この琵琶湖、薬師如来の力を背景に日本を統治するという思想は、徳川家康に継承され、江戸のグランドデザインに具現化されることになる。

この意味において安土城は、琵琶湖と薬師如来の思想が、一国の統治のみならず、都市景観形成にまで影響を与えた文化遺産として評価される。

④琵琶湖疏水（写真15）

明治維新により、東京に実質上の首都が移ったことから、京都は著しく衰退した。この復活の起爆剤として計画されたのが琵琶湖疏水である。

琵琶湖と京都を疏水で結ぶことにより、船運、発電、灌漑等に活用しようとするもので、明治14年（1881）、京都府知事北垣国道の主導により計画され、国家事業として着手された。

工事は、日本人土木技師による我が国初の設計、施工、監理により行われたものであり、土木史上高く評価される。琵琶湖疏水は明治23年（1890）に莫大な経費と労力を費やして竣工した。

結果として、最も期待された船運は、陸上交通に替わり、ほとんど機能することはなかった。しかし、琵琶湖と京都の高低差を利用した水力発電は、京都に安定した電力を供給し、これを元に、我が国初の電気鉄道が運行されるなど、大きな効果をもたらした。また、京都への安定した水資源の供給源として、今なおその価値を失ってはいない。

琵琶湖疏水を文化的に評価する際に参考となるのが、北垣知事が作成した「機構趣意書」である。ここには、文明開化により、自然との共生文化を忘れかけてきた、日本人の姿が如実に表れている。趣意書によれば、工事の目的は以下の7項目であった（浅見2005）。

1 運輸のこと、2 製造機器のこと、3 田畑灌漑のこと、4 精米のこと、5 火災防慮の事、6 井泉のこと、7 衛生に関すること。これらの目的は、下流の京都の利益に資するばかりであり、琵琶湖および琵琶湖を擁する近江への配慮は、ほとんど無いといって良い。

しかし、視点を変えるならば、北垣知事が工事の目的として掲げている事項は、いずれも、近江の先人達が琵琶湖

と共に培ってきた文化である。ただ、この文化は、琵琶湖の畔に生きる人達が造り上げてきたものであるが故に、琵琶湖に対する配慮、すなわち琵琶湖との共生の思想が根底に流れている。であるからこそ、文化なのである。

琵琶湖疏水の思想は、琵琶湖を資源としてのみ評価するところから始まっており、水と共に生きるという、琵琶湖の持つ文化に配慮されたものではない。琵琶湖に対する「文明」としての皮膜のかかった評価であり、未来を照らすものではない。

琵琶湖疏水の文化的価値は、琵琶湖の畔で形成されてきた、いみじくも北垣知事が趣意書で述べている事項に対し形成してきた琵琶湖の文化を、いかに下流住民が理解し、謙虚に、水との共生文化を根付かせるかを考える、反面教師的な価値として評価される。

（4）芸術母体としての琵琶湖

①近江八景（写真16）

近江八景は、中世末から近世初頭にかけて活躍した近衛信伊が、中国の瀟々八景を元にした琵琶湖岸の景勝地で、近世から近代にかけて、多くの旅行者や、行楽、参詣の人々が訪れる、日本を代表する観光地となった。

近江八景のモデルとなった瀟々八景は、中国北宋時代に成立したもので、山水画作成のモチーフとして創出された観念的景観の側面が強い。これに対して、近江八景は、琵琶湖岸の実景を選ぶことにより、名所としての魅力を強く発揮することになる。

近江八景は、日本の景観地の代名詞としても定着し、その伝統は今なお国内各地に息づいている。平成16年度国立環境研究所の調査によれば、全国に630カ所余りの「八景」および類する景観が存在するという。調査漏れもあるであろうから、我が国に千カ所近くの八景が存在すると考えられる。八景は各地域を代表し、地域の誇りとなっている景観地である。これらの景観は、いずれも、近江八景を翻案したものであり、日本の名所景観に対する概念の基層を近江八景が造り上げたとして評価される。

また、近江八景は、単なる名所（景観地）としてだけではなく、近世近代の日本文化形成に、大きな役割を果たして来た。例えば、絵画作品、陶芸を始めとする各種工芸作品に、近江八景は重要なモチーフとして採用され、優れた作品が生み出された。また、絵画のみならず、詩歌、落語にまで取り上げられ、近世、近代の我が国の芸術文化に与えた影響は、計り知れないものがある。

中でも、近江八景は、我が国独特の絵画表現として発達した、浮世絵の題材として多く取り上げられた。特に安藤広重は生涯に二十八種類もの近江八景シリーズを制作し、これを世に送り出している。その代表的なものに保栄堂・永久堂版（1834年頃）と魚栄版（1857）がある。前者は主景をデフォルメし、その特徴を強調した作品群で、船の帆

の情景などを通して、時間の流れを絵画的に表現する工夫などが凝らされており、風景浮世絵を代表する作品として高く評価されている。これに対して後者は、より写實的に、色彩的にも美しく近江八景を捉えた作品群である。作品の視点を現状の景観にほぼ特定できることから、広重自身が近江において写生した作品であろう。

この二例にとどまらず、近江八景浮世絵のモチーフには、必ず琵琶湖が描かれ、その背景に比叡山を始めとする山々が描かれる。そして、そこに琵琶湖を取り巻く人の営みが点景として加えられる。日本を代表する景観である近江八景は、琵琶湖と、この水が生まれる山無しには、有り得ないことを、広重は見抜いていたのであろうか。

近江八景は、中国で生まれた観念的景観が、琵琶湖により実景としての景観に昇華し、これが日本全国の広まり、優れた景観の代名詞となった。このことは、国境を越えた景観に対する感性の交流として高く評価される。さらに、広重の作品に代表される風景浮世絵は、当時の欧米にもたらされ、所謂ジャポニズムと呼ばれる、芸術表現を生み出し、近代芸術の展開に大きな影響を与えた。特に広重の作品は、その青の美しさから「ヒロシゲブルー」と、高く評価され、愛好された。近江八景魚柴版に見られる琵琶湖の青は、まさしく欧米人が憧憬した青であり、瑠璃の光であった。このように、芸術作品を通して、琵琶湖の景観は世界の芸術の展開に大きな影響を与えた、世界的価値の高い景観であると評価される。

②義仲寺境内

義仲寺は津市に所在する寺院で、その名の通り、木曾義仲の菩提を弔うために建立された寺院であり、その墓所ともなっている。

義仲寺と琵琶湖との関わりは、江戸時代の俳人、松尾芭蕉との関係から評価される。

松尾芭蕉は、寛永21年（1644）に現在の三重県伊賀市で生まれた。紀行文「奥の細道」が特に名高いが、芭蕉は、生涯に度々近江を訪れ、近江の情景を題材に90句近い作品を残している。近江における芭蕉の活動の拠点となったのが、義仲寺の境内に、門人達の手により営まれた「無名庵」である。特に晩年の芭蕉は、度々無名庵に止宿し、琵琶湖を巡り、門人達と交流すると共に、活発な創作活動を繰り広げた。

霰せば 網代の氷魚を 煮て出さん

行く春を 近江の人と 惜しみける

芭蕉が近江を愛したのは、俳諧を理解する高い文化が近江にあったこと、そして何よりも琵琶湖の美しい景観であった。「芭蕉翁行状記」によれば、芭蕉は近江を以下のように表現している「ここは東西のちまた さざ波きよき渚なれば 生前の契り深かりし所也」とし、死後、琵琶湖の畔、義仲寺に葬られることを遺言する。元禄7年（1694）芭蕉は大阪で没するが、遺言通り義仲寺の境内に葬られた。

松尾芭蕉は、蕉風と呼ばれる芸術性の高い句風を確立し、その作品は、我が国を代表する古典文学として、海外でも高い評価を受けている。また、俳句は、日本のみならず、世界中の愛好者が広まっている文学表現であり、日本文化が世界の文化に影響を与えた代表的なものであろう。

この芸術としての俳句は、芭蕉により確立したものであり、そして、彼の芸術的感性の源に、近江の風土と琵琶湖の景観があったことは間違いない。この意味において、琵琶湖の文化は、世界の文化に対して少なからぬ影響を与えたと評価できる。

（5）琵琶湖自体が持つ価値

これまで、文化遺産琵琶湖を構成する要素について、分析した。それでは、琵琶湖自体の文化的価値はどうだろうか。琵琶湖自体は、個々の要素の総体としての価値を持ち、琵琶湖自体のみを切り離して評価することは適切ではない。しかし、あえて琵琶湖自体に対する、文化遺産的価値を評価すれば、湖上交通の航路としての史跡的価値・優れた景観と文化芸術の舞台となったことに関する名勝的価値・古代湖であり、多数の固有生物が生息するという天然記念物的価値・漁業を中心とする湖面の利用景観に関する重要文化的景観の価値を持ち、文化財保護法で記念物に対する特別な保護対象とする、全ての要素を持っている。

4. 文化遺産琵琶湖の持つ価値と可能性

以上、琵琶湖文化を構成する様々な資産を概述し、分析を試みた。それでは、文化遺産としての琵琶湖の価値とは、蓋然性のある基準に照らしたとき、どの様に評価されるであろうか。ここでは、その基準として、「世界遺産条約履行のための作業指針（以下「作業指針」）」に基づき、評価を試みたい。作業指針では、対象となる遺産に対して、「顕著な普遍的価値」を有することを求めている。この顕著な普遍的価値とは、次のように説明される。

「顕著な普遍的価値とは、国家間の境界を超越し、人類全体にとって現代及び将来世代に共通した重要性を持つような、傑出した文化的な意義及び又は自然的な価値を意味する」。

顕著な普遍的価値の評価基準と文化遺産琵琶湖

（i）人間の創造的才能を表す傑作である。

この項目に関しては、本項では取り上げなかったが、概述した比叡山延暦寺、日吉大社、竹生島、彦根城等には多数の国宝、重要文化財に指定された建造物が含まれており、国内の他の世界文化遺産を構成する遺産と比較しても遜色ない。また、これらの建造物は、何れも水に対する信仰、或いは水との共生という視点から評価されることから、本基準は満たされている。

（ii）建築、科学技術、記念碑、都市計画、景観設計の発

展に重要な影響を与えた、ある期間にわたる価値観の交流又はある文化圏内での価値観の交流を示すもの。

この項目についても詳述しなかったが、坂本里坊を構成する建造物群、近江八幡の近江商人屋敷群は、特徴ある都市計画遺産として評価される。また、彦根城に見られる城郭建築は、他の城郭との関連から評価される。さらに、琵琶湖疏水は、日本人技師による、初の大規模土木工事遺産として科学技術の側面から評価される。また、基準 i に含まれる建造物も、同様に評価することが可能であることから、本基準は満たされている。

(iii) 現存しているか消滅しているかにかかわらず、ある文化的伝統又は文明の存在を伝承する物証として無二の存在（少なくとも希有な存在）である。

この項目については、まず、世界唯一と言っても良い、大規模淡水貝塚である粟津湖底遺跡、石山遺跡があてはまる。季節ごとに食料採取の環境を変え、自然に対して働きかけることなく、自然に生きた生活の様相は、まさにこの項目に適合する。さらに、針江深溝の水辺景観、海津の水辺景観、沖島の居住景観は、琵琶湖文化を具体的に示す文化的景観である。また、琵琶湖自体が、希有な「文化的伝統」を示す遺産であり、本基準は満たされている。

(iv) 歴史上の重要な段階を物語る建築物、その集合体、科学技術の集合体、あるいは景観を代表する顕著な見本である。

この項目は、基準 i を満たす諸建造物が適合する。また、景観を代表する顕著な見本として、琵琶湖および近江八景が、浮世絵を通して国際的な影響を及ぼした景観として評価される。よって、本基準は満たされている。

(v) ある一つの文化（又は複数の文化）を特徴付けるような伝統的居住形態若しくは陸上、海上の土地利用形態を代表する顕著な見本である。又は、人類と環境とのふれあいを代表する顕著な見本である。（特に、不可逆的な変化によりその存続が危ぶまれているもの）

この項目は、自然の水と共に生きる針江の居住形態、あるいは、淡水の湖の島という、希有な環境で形成された沖島の居住形態が適合する。坂本里坊群、近江商人の屋敷群も、伝統的居住形態として評価される。

土地利用の形態としては、近江八幡の水郷、針江のヨシ群落が、琵琶湖の浄化をもたらす植物資源利用の形態として評価される。さらに、少なくとも国内では例を見ない、多様な内水面漁撈は、「湖上の利用形態」として高く評価される。加えて、琵琶湖とこれを取り巻く山、滝、川は「人類と環境のふれあい」を代表する景観である。

また、琵琶湖で形成された「ナレズシ」は、日本人の食文化形成に多大な影響をおよぼしたばかりでなく、日本食の代名詞として、世界と交流している。

よって、文化遺産琵琶湖は、人類が求める自然との共生の顕著な見本として、普遍的価値を有することから、本基

準は満たされている。

(vi) 顕著な普遍的価値を有する出来事（行事）、生き伝統、思想、信仰、芸術的作品、あるいは文学的作品と直接または実質的関連がある（この基準は他の基準とあわせて用いられることが望ましい）。

命を生み出す象徴的な行事としての葛川明王院の太鼓廻し、さらに代表的な「みあれ」の行事である日吉山王祭の舞台である日吉大社は「普遍的価値を有する舞台」として評価される。また、比叡山延暦寺および回峰行の道が示す、アニミズムと深く結びついた日本的仏教の姿は、インドで生まれた仏教の到達点であり、思想の国際的な交流を示すものである。さらに、ここに琵琶湖の思想が加わり新たな思想として、鎌倉新仏教が巣立ち、日本人の精神形成に多大な影響を及ぼし続けている。さらに、日本仏教の思想は世界に向けて発信されつつある。このように、琵琶湖との共生に根ざす延暦寺の思想は「生きた伝統、思想、信仰」としての普遍的な価値を有する。さらに、近江八景を題材とした浮世絵、松尾芭蕉の俳諧、そして、万葉集を始めとする多くの古典歌集に詠まれた琵琶湖の景観は、芸術の面で、琵琶湖文化が世界と交流している顕著な見本である。よって、この基準も満たしている。

(vii) 上級の自然現象、又は、類い希な自然美・美的価値を有する地域を包含する。

この基準以下は、自然遺産の基準である。しかし、琵琶湖の景観は、上記以外の芸術作品、例えば万葉集に詠まれる等、古來人の心を引きつける最上級の自然美をも有する。また、その地域の景観美を代表する「八景」の祖型が琵琶湖であることを勘案すれば、日本における美的価値を有する景観の典型として評価される。よって、この基準も満たされている。

(viii) 生命進化の記録や、地形形成における重要な進行中の地質学的過程、あるいは重要な地形的又は自然地理学的特徴といった、地球の歴史の主要な段階を代表する顕著な見本である。

琵琶湖は、日本唯一の古代湖であり、大湖である。そして、その地質的年代は400万年に及び、世界的に見ても極めて古い湖として評価されており、この基準も満たされている。

(ix) 陸上・淡水域・沿岸・海洋の生態系や動植物群集の進化、発展において、重要な進行中の生態学的過程又は生物学的過程を代表する顕著な見本である。

琵琶湖の長い歴史を物語るように、ここには多数の固有生物が生息しており、その種類は日本の淡水湖としては群を抜いて多種類である。このことから、本基準も満たされている。

(x) 学術上又は保全上顕著な普遍的価値を有する絶滅のおそれのある種の生息域など、生物多様性の生息域内保全にとって最も重要な自然の生息地を包含する。

上記基準で評価したように、琵琶湖には多数の固有種が生息している。そして特に固有魚介類に対する多様な食文化が根付いており、この文化を継承するためにも、固有種を減らすことはできない。このように、自然的側面、文化的側面からもこの基準は満たされている。

5. おわりに

以上、世界文化遺産、自然遺産の登録基準を元に琵琶湖の文化的な価値を評価してみた。結果、全ての項目において琵琶湖は「顕著な普遍的価値」を有する遺産であると評価できた。まさに、世界で唯一無二の遺産である。そして文化遺産琵琶湖の価値は、これが、化石としての文化遺産ではなく、人間が歩むべき未来への道を照らす、道標となる、生きた遺産であるところにある。

文化遺産琵琶湖を構成する、個々の文化遺産それぞれが優れた価値を持っている。それらは、「個」としては、これからの人類が進むべき道筋を照らしてはくれない。しかし、文化遺産としての琵琶湖は、これまで述べたように、自然と人間との共生の中で培われた、多様な文化遺産群の総体として機能し、維持されてきた。であればこそ、ここに「顕著な普遍的価値」が認められるのである。

そして、文化遺産としての琵琶湖が、現代、未来に亘って、機能するためには、「文化遺産琵琶湖を貫く柱として、水（自然）と共生する文化があることを踏まえ、この文化を維持し、深化させることにより、この共生関係を永続させる。」ことが不可欠である。

例えば、水資源という、狭い視点から琵琶湖を見ても、滋賀県民約130万人、琵琶湖流域人口約1400万人が、琵琶湖に命を委ねているのである。日本の人口の、一割以上もの人間の命を預かる琵琶湖。この多くの命を継ぐためには、少なくとも、現代の琵琶湖を維持させなければならない。科学文明を駆使して、水を浄化する術を我々は既に手に入れた。しかし、科学文明を自然に行使することの負荷もまた、同時に知った。これから、どの様に琵琶湖（自然）と向き合うのか、未来と向き合うのか。その答えは、「人間もまた自然の一員である。」という、自然との共生の思想に根ざした、琵琶湖文化が教えてくれる。

この問題は、滋賀県民と琵琶湖の関係だけにあるものではない。日本、そして、全世界の人間が、地球との関係で直面している問題でもある。われわれが、文化の力で琵琶湖を維持できるならば、このことは、必ず、人類が地球を維持して行くための見本となるはずである。

世界に唯一無二の文化遺産、琵琶湖。この、琵琶湖を擁して生きる我々に、琵琶湖は、何物にも代えがたい誇りを与えてくれる。その誇りとは、この文化遺産とともに暮らすことに由来し、そしてこの誇りは、世界の何処にも代えるものがない琵琶湖を、未来に伝えるという、重い責任を担う自負を持つことにより、より確かなものとなる。

註

(1) 酒井毅氏の示唆による。

文献（著者名・刊行機関名50音順、刊行年順）

- 秋田裕毅（1992）『神になった織田信長』小学館
- 浅見素石（2005）『よもやまばなし 琵琶湖疏水』サンライズ出版
- 石毛直道・ケネス＝ラドル（1990）『魚醬とナレズシの研究－モンスーンアジアの食文化－』岩波書店
- 宇仁義和（2007）『歴史的自然としての知床の海』、秋道智彌編『水と世界遺産』小学館
- 大沼芳幸（2010）「フナズシに関する琵琶湖文化史的考察－「湖中他界」序説として－」『紀要』23、財団法人滋賀県文化財保護協会
- 景山春樹（1976）『葛川明王院と地主神社』『山岳宗教研究叢書22 比叡山と天台仏教の研究』名著出版
- 景山春樹（1976）『日吉社祭祀考』『山岳宗教研究叢書22 比叡山と天台仏教の研究』名著出版
- 北川隆啓（1988）『桑實寺遷史』桑實寺
- 五来 重（1986）『薬師信仰総論－薬師如来と庶民信仰－』『民衆宗教史叢書 第22巻 薬師信仰』雄山閣
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（1997）『粟津湖底遺跡 第3貝塚』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（2000）『粟津湖底遺跡 自然流路』
- 朱 安新（2007）『雲南麗江古城の消えつつあるナシ族社会』、秋道智彌編『水と世界遺産』小学館
- 高島市教育委員会（2010A）『池の沢遺跡発掘調査報告書－庭園遺構の調査－』
- 高島市教育委員会（2010B）『高島市針江・霜降の水辺景観－新旭地区カバタとヨシ群落－保存活用事業報告書』
- 高月町教育委員会（1995）『古保利古墳群 詳細分布調査報告書』
- 中井 均（1997）『近江の城－城が語る湖国の戦国史－』サンライズ出版
- 日吉大社（2009）『国指定史跡日吉神社境内保存管理・環境保全計画書』
- 三重県埋蔵文化財センター（1992）『城之越遺跡』
- 横田洋三（2011）『塩津港遺跡に見る神社遺跡調査の現状と課題』『人間文化』28、滋賀県立大学人間文化学部

表・写真典拠

表1 大沼作成。

写真1～3・5・6・8～12・14～16 大沼撮影。

写真4 財団法人滋賀県文化財保護協会提供。

写真7・13 滋賀県教育委員会提供。

（おおぬま よしゆき：企画調査課・調査普及課 課長）



写真1 延暦境内（根本中堂）



写真5 竹生島



写真2 樹下神社霊泉



写真6 池ノ沢庭園中島



写真3 旧竹林院庭園



写真7 粟津第3貝塚



写真4 葛川明王院太鼓回し



写真8 針江カバタ



写真9 沖島漁港



写真13 塩津港遺跡全景



写真10 イワトコナマス



写真14 織山と安土城



写真11 ビワマス



写真15 琵琶湖疏水



写真12 フナズシ



写真16 近江八景唐崎

【編集後記】

本号は、当協会設立40周年を記念する特別号として、ボリュームアップをはかり、職員全員に投稿を呼び掛けたところ、総数17本を掲載することができた。

今回は、近年の注目すべき調査事例である東近江市相谷熊原遺跡に関連した3本の論考をまとめ、小特集とした。松室論文では、相谷熊原遺跡を縄文時代草創期と位置づける根拠となった「矢柄研磨器」について基礎的な検討を行っている。重田論文では、相谷熊原遺跡をはじめとする鈴鹿山中の諸遺跡について、選地原理の抽出を試みた。一方、出土遺物のなかでも特徴的な土偶について、瀬口論文では学説史をたどり、その評価の基礎固めをはかった。こうした検討を進めて、次年度以降、調査報告書刊行に向けて、整理調査を行っていききたい。

その他の論考は、時代・対象ともに実に多様なものとなった。縄文時代を対象としたものに、県内出土縄文土器の資料化と検討を行った小島論文、志那湖底遺跡出土岩田第4類土器群について検討を進めた小竹森論文がある。古墳時代では、辻川論文で県内出土埴輪の資料化と検討作業を行っている。古代を対象としたものには、これも近年の注目すべき調査事例－長浜市塩津港遺跡出土起請文木札に関し、基礎的な検討を行った濱論文や、柱穴構造から掘立柱建物の上部構造について意欲的に復元を試みた横田論文、県内に特徴的な飛雲文軒瓦の比較資料として三重県内の出土事例を報告した中西論文がある。中・近世を主な対象としたものとしては、湖南省夏見城遺跡出土毛抜きを位置づけることを目的として、毛抜きをはじめとした全国の化粧道具出土事例に関する検討作業をおこなった堀論文や、東近江市観音寺城遺跡の構造に関して再検討した伊庭論文、出土将棋駒を手掛かりに将棋史の一端に迫った三宅論文がある。さらに、阿刀論文では、滋賀県立安土城考古博物館での展示に携わったなかで見出された「忍者」研究について現状と課題がとりまとめられている。大沼論文では、琵琶湖を「文化遺産」として捉え、様々な側面からそれを構成する「資産群」の文化的価値について評価した結果、人類にとって「顕著な普遍的価値」を有する遺産であると結論付けている。具志堅論文では、当協会が重点的に推進する普及・活用・体験学習の一環として、本年度に実施した体験学習の内容と課題について報告し、中川論文では30年にわたる滋賀県における保存処理を振り返り、現状と課題を整理している。

近年、埋蔵文化財をはじめ文化財に対する需要は多様化し、求められる成果のレベルも高くなってきていることを痛感する。このようなニーズに的確に応じていくためには、職員一人一人の資質の向上が不可欠であることはいうまでもない。埋蔵文化財のみならず、地域の文化財の多様な側面に切り込み、その価値を見出すとともに、それを広く理解していただけるように伝える能力が今まで以上に必要となっている。本紀要も、そうした能力・経験・知識の獲得と蓄積、情報の発信の手段の一つとして位置付けている。

掲載論考の内容は未だ十分なものとはいえないことは承知しているが、読者の皆様には温かいご意見・ご批判を重ねてお願いする所である。

編集担当（T-T）

紀 要 第24号 —設立40周年記念号—

刊行年月日：平成23年（2011年）3月31日

編集・発行：財団法人滋賀県文化財保護協会

520-2122 滋賀県大津市瀬田南大萱町1732-2

(tel) 077-548-9780 (fax) 077-543-1525 (e-mail) mail@shiga-bunkazai.jp

印刷・製本：三星商事印刷株式会社

ANNUAL BULLETIN
of
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage

Vol.24 2011.3

私たちは文化財をとおして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage